

講 話

チャールズ ダーウィンの性格

理學博士 谷 津 直 秀

明治四十二年一月一日ボルチモアにて開かれたる米國理學獎勵會のダーウィン祭晩餐の席上にてボルルトンの講演を稍省譯して明治四十三年十一月二十四日のダーウィン紀念祭にて朗讀せしものなり

ターナー教授の云ひし如くニッートンの偉才も殆んど俗事の爲めに没却せられんとせしことありし如くダーウィンにして自身生計の爲めに収入を得るに働きたらば何事をなさずして世を去りしも計り難し彼は父より引き継ぎし財産に負ふこと大なりとは常に口にせし所にしてハックスリーに宛たる書翰中に『小生は毎日仕事の出来候時間は貴君の驚かるゝ程短くして若し貴君やフッカー君の如く一定の職業に従事し居り候へば小生は全く科學を研究すること出来ず候』とあり然し金錢の自由なりしことのみが唯一の條件にあらざりしことを忘るべからず即ち彼の夫人及び子供等の愛養に負ふ所少からざりしなりダーウィンの其子供達と共に在つて如何に幸福なりしかは次の一事を見ても知るを得べし或る六歳になる子供がダーウィンに来て遊んで下されば二十五錢上げると云ひき彼は『吾人は仕事の神聖なることを知れども誰か能く

此二十五錢に反抗することを得ん』とて愉快げに遊び弄れたりといふ又あるときダーウィンの子供は通常子供の思ふ如く自分の父の仕事を他の父も爲すものと心得て隣家の子供に『君の父はフヂツボを如何して居る』と問ひたることもありし由。

一定の仕事をなすことはダーウィンの健康上必要なりとなり故に病氣のときは仕事出来ざる爲めに回復遅かりしなり健康の爲に仕事をなし仕事の爲に健康の注意を常に怠らざりしなりダーウィンの健康の變化の多かりしことは種々の誤解を生ずる原因となれり彼の家族の爲に書き遺したる自傳中に年三十有餘歳までは詩と音樂とに非常に興味を持ち繪畫にも其に劣らざる程嗜好心を有せり故に『ビーグル』號に乗船の際に若し一卷の書籍より携へ得ざる場合には常にミルトンを擇びたり後に精神狀態漸と變化し詩も面白味を失ひ一行をも讀むを欲せざるに至れり繪畫も美しき景色も共に快感を起さざる様になり音樂は餘り劇烈にして反つて不快を感じしむるに至れり

(講 話) ○チアールズ ダーウィンの性格(谷津)

此變化をダーウィン自身例の單純なる調子にて餘りに卑下したる態度にて書きたり之よりしてダーウィンの生活の缺點否科學の缺點とまで云ふ人あるに至れるは蓋し詳しく彼を研究せざるよりの誤解にて若し彼をよく知るに至れば如何にして此の如き變化の來りしやを知り且つ彼の性格の美を見出すに難からざるべし。

ダーウィンの健康を害せるは一八三六年(廿八歳)に航海より歸りし時と一八四二年(三十四歳)にロンドンの都を去つてダウンの村に退隱する間に彼の審美的趣味の變更を來せるも實に此時期にありとす此期の終りに近づき彼の健康狀態に急激なる變化を來せしものの如し其は一八三九年の一月二十日(三十一歳)には談話を樂むとか決して元氣を失はずとか書き送りし書翰あれど一八四〇年(三十二歳)に『ビーグル』號の船長フィッツロイ、一八四一年にライエルに宛てたる書中には將來の仕事の上に就て大に落膽し當時は衰弱も後よりは一層強く感ぜしものの如し健康の最も良き時にても一日に四時間以上働くこと出來ず少し悪しきときは一時間か一時間半となり最も悪しきときは數ヶ月間も仕事を休むことあり然して前述の如く仕事は健康に必要ありしなり彼は常に云ふ『時々往來する不快の感を忘れしむるものは仕事の外になし』と健康を保持する爲めに彼は規則正しく仕事をなし外の方面の刺戟を全く除きたるなりダーウィンは仕事に従事するときには非常に熱誠を込めて働くなり故に時々他人に

口授して筆記せしむる際突然中止して『いや、もうやるまい』との嘆聲を漏らすこと屢なりしと云ふ健康此の如くなりし故他の事は全く出來ざりしなり、ブラッドレー教授は嘗て云へりシエクスピアを讀み誤解するは想像力の鈍りしときなりと如何なるものにも文學と名の付くものは讀者の餘程の意氣込みを要する然るにダーウィンには其意氣込みを出すこと能はざりしなり彼の生活は只健康と仕事との二の調節にありしなり而して休日も運動もダーウィンはとらざりし健康餘程惡しきときよりの外は家より旅行せしことなし醫者の勧めによりて水浴場に行くことあれど其先に於て矢張種々のことを考へ時間を空過することなし此の如き短き旅行の後には家にて愉快に仕事にとりかゝるを得るなり。

前述のダーウィンの精神狀態の變化の原因に就ては次の引照によるも明なり即ち一八七六年の自傳に『余の生涯にて主なる樂みは科學的の仕事にて其に熱中すれば其時だけは日々の不快の念を忘る』とありダーウィンの死する一年前(一八八一年六月十五日)にフッカーに宛たる書翰には『小生はなんとなく落膽の狀態となれり小生の不快は貴君のと反し何も仕事をせぬ事に御座候かくすれば一時間も不快を忘るること出來申さず候今は既に小生の好物なる數年にわたる研究を始めんと思ふも其力なく其とて一寸した仕事も手につき申さず只ダウンの墓を地上の最も樂しき所と思ふの外無之候』とあり。

以上の如く彼の生涯中病氣と仕事との奮戦は端なくも自傳(一八八一年)中の記事に誤解を起さしむるに至れり他の事に興味を減せしことは慥なれど同情及び感情の方面には減退せし所を認めず自傳の一節に『高尚なる審美的の趣味を失ふは幸福を失ふにて智的の方面にも害ありて吾人の感情を鈍くし猶論理的にも害あり』と記せり。

一八六〇年六月卅日(土曜日)に『オックスフォード』に開かれたる英國理學獎勵會の席上にて彼の有名なるハックスリーと『オックスフォード』の監督との間に壯烈なる論戰ありたり其場所は未だ鮮かに記憶あるが當時漸く竣功したる大學博物場の西南に面せる第一階の室なりしかくて翌日の夜遅くフッカーは出來事をダーウィンに書き送りしに七月一日(日曜)の返事に『小生は二日間頭痛の爲めに閉口致し氣もふさがちなりし折しも貴君に接し元氣を回復致し候貴君友情の深きは小生をして涙に噎ばしめ候名譽、快樂、富貴等も貴君の愛情に比すれば土塊の如く感じ申候貴君より察し申せば主義に於て小生も心底より一致するとは云々……』とあり是れダーウィンの一時の感情よりしたるに非ず能く其事の價を了知し居りしや明なり其はハックスリー宛の手紙にて知るを得『處處よりの評判より察すれば貴君は慥に『オックスフォード』に餘程氣味よき打撃を與へたるは相違無之なにしろ第一流の二三の學者が自説を發表するに如何に大膽なるかを世界に示すは最も緊要と存候』

ダーウィンの反對者に對する態度は注意すべきものに『ジョルジ・ヘンリー・ルーキスの『ペルメル・ガゼット』』と云ふ雜誌に記せしは善く其意を表せるものなり即ち『ダーウィンの自己の説を發表するに極めて平和にて其に對して社會の熱度高き反駁に少しも動搖せられず反對論者を嘲弄し或は怒らし卑むことなかりし此忍耐は如何にも尊きものなりダーウィンの著書中一箇所も反對者の意を害する句なく他の研究者の誤謬を摘發したることなし其に反し少しにても他の人に負ふことあれば必ず明記しあり云々』

ダーウィンの種原論を一冊遙々大西洋のかなたなる進化論の反對者ルキ・アガシーに寄贈せるとき書き添へて『結論は貴君のと小生のとは餘程差異者有之候故若し此書を御讀みの際は多分反抗の意を含んで贈呈したりと御思考遊ばさるゝやも計り難く存候へども小生の方に於ては此の如き念慮は毛頭も無之只結論は誤りなるも小生の熱心に眞理を追究することだけを御覽被下れば幸甚の至りに候』

喧嘩好きなるヘッケルに送りし文中に『貴君は多分怒らるゝならん然し其怒たるや誰れをも盲目とするものにて貴君の説を廣むる機を失ふものと存候猶又友誼の厚き間に必要もなきに多く敵を作り出し給ふは好からず此世の中にはことさらに作らずとも苦勞や面倒なること随分澤山有之候』とあり。

ダーウィンの新説のかくまでも早く廣まりし原因はまた一に著者の讀者に對する態度によりしと云はざる可からずフランシス・ダーウィンの著に『父の種原論の調子は實に床しく又悲惨なり眞理を自身にて握り然も他人を之に引き入れんとする様子なく熱中したる人の強て他を屈服せしめんとするものと霄壤の差あり讀者の懷疑的なるを咎めず反つて其人々に尊敬を拂ふ云々』人の心は理性の「靜なる私語」より熱烈なる論鋒に引かるゝものなれども此「靜なるさゝやき」に因つて世界の思想は變遷し行くなり。

ダーウィンの己を助けし後輩を麗しき同情を以て遇するは次の一事にても知るを得現今『コロムビア』大學の動物學主任のイー・ヴィー・ウィルソンの一八八一年に裸鰐類の海藻に面白き擬體をなす實例をダーウィンに書き送りしに當時二十五歳の名もなき學生にも拘らず鄭重なる返答を得たり又エヂンバラの植物園の雇なるジョン・スコットにダーウィンの考案にかゝる實驗を行はしめ多くの時間を費せしのみならず常に獎勵に怠りなかりし此スコットにリンネ協會に報告を出ださしめたる時『これは自分の論文としても耻しくないものだ』と賞めフッカーに宛ては『どうか此者に誰でも賞讃の言葉を與へ下さる様切望致候』と書き送りたり。

又ダーウィンは滑稽に富み時としては子供の如きことあり之を特にジョン・フッカーに宛たる手紙に於て見る。

ダーウィンの著書中に彼の研究せし動物に對し床しき愛情が活躍し鶏と鳩の雛を實驗に使用せしときの如き『之まで愛養せし子供を斯く慘事に來らしむるとは吾ながら信ぜられぬ程に候』又孵化後數月を経たる鳩の子に就て『小生は彼等を餘り愛する爲め骨骼となすに忍びず候』と書きたる手紙あり。

かく動物を愛することよりして活ける動物を其まゝ解剖すること餘程殘忍と彼は感ぜしものの如しランケスターに宛たる書翰に『此事を考ふるに堪へ難き程にて今夜眠ること出來ざるやも知れず』云々然し同時に生理學の進歩は此の如き實驗によることは彼の娘に送りたる手紙にて明白なり又エドモンド・ガーネーの活物解の論文に關してダーウィンは數週後に次の如く書きたり『小生は彼の云ふ所に凡て賛成致候へども只人間に對し直接なる實驗の外は行ふべからずとあるは大なる誤りにて科學の歴史に反對するものと考へ申候』。

又ダーウィンの自己の假説を愛する情は如何にも深くして時に滑稽と思はるゝことあり嘗て卷鬚の發達を研究せし際其と葉とはよく漸次の變化あれども莖とは關係なく枝の變化と思はれたり此事を議してフッカーが書き送りし手紙の最後に『若し自己の假説の證明を與へ下されば五圓を進呈致すべく候』とあり。

ダーウィンは個體の部分發生の順序と體制の複雑の度に關する假説に就てはハックスリーと反對の意見を抱き

居りしが彼の手紙に『此事は先づそれとして科學者は一般に望みとか人情とかをすて心は鐵石の如くせざるべからず』とあり其意味は前記のジョン・スコットに送りし文書中に明なり『小生の守らんと心掛け居り候金言は人の從來抱く考に反對なる事實を明白にすることに候又觀察の極精確なることが最難のことにてしかも最も價あるものにて之に反するものは取るに足らざるものと考候』とあり又一八一八年の自傳中に『余は常に如何なるものにも假説を造らずに居られざりしが同時に如何に愛する假説にても共に反對の事實顯はれたるときには潔よく捨つることを力めたり云々』。

最後に述ぶべきはダーウインの考には科學者の最必要なる要件は學問を學問として愛することなりしなり一八八一年の自傳中に自身の成功の要素は主として科學を愛するの情にありと云へり此事は四十歳に足らざりし時彼の老師に書き送りたるに『先生の書かれしことの中に小生の臍に落ちざることありそは科學の研究が如何に愉快なりとも直接の應用なき以上は空中の樓閣の如きとのとに御座候かく云はるれば科學の發見の目的は實用のもののみ賞賛を博する様に聞え候に非ずやクロ、フォームの發明の如き純粹學的事ことよりして遂に實用に應用せられたるに候はずや小生は科學の研究に其より一步高きものの存する如く考へられ候小生の中には道義心に類する一種の眞理に向ふする本能ある様に感ぜられ候吾人の

其れを有することが科學研究の理由にて其外に實用的のことは無くとも宜かるべしと存候』。

同様なことをダーウインの再從兄弟のダブルユー・ジョイ・フックスに書き送りし手紙にて知るを得『小生が名譽の爲めに仕事をするを考へらるゝは貴君の誤りに候小生も何分かは名譽を重じ候へども眞理を發見する本能の如きものによつて働き申候』。

此ダーウインの執りし高尚なる主義は現今は科學の研究に必要な唯一の動機として知らるゝに至れり此科學的精神は反物質的となり一時流行を極めたり嘗て『ケンブリッヂ』大學の數學會の晩餐席上にて祝盃を揚ぐるとき一人高聲に『願くは最近の純正數學の發見が誰の役にも立たざる様に』と云ふに至りしは極端なり。

他のダーウインの天才の一部は一八八一年の自傳にもある如く通常の人なれば見通す程の事實にても注意して精細に觀察したることなり。

ダーウインの世界歴史に於て特に智界に於ての位置に就ては科學者よりも寧ろ文學的の趣味あるロード・コートネーの數年前皇立學士院の年會の席上にて云ひしことを引かんに『英國には文學者にはシェクスピアあり或る人は次にミルトンありバイロンありと云はん然し自身の考ふる所によればシェクスピアの外は無し次に目を轉じて科學界を見るにニットンとダーウインとは兩々相比肩て群嶺を抜いて頭角を顯はせる二秀峰とや云はん』と。